

# 令和4年度大雪山国立公園連絡協議会

## 表大雪/東大雪地域合同登山道維持管理部会（第4回）議事録

- 日 時：令和4年12月19日（月）13：30～16：30
- 場 所：上川町役場（大会議室）オンライン会議システム併用
- 出席者：資料の通り（NPO 法人かむい欠席）
- 概 要

### 1. 開会

#### ■大雪山国立公園管理事務所 広野（以降、事務局）

- ・本日は年末のお忙しい中、多数の方の出席に対し、そして日頃の国立公園の管理に協力頂き御礼申し上げます。  
登山道維持管理部会は昨年12月以来、一年ぶり、4回目の開催で、今回は表大雪、東大雪合同での開催となる。合同開催した理由は、前回の部会から大雪山全体での一元的な管理組織の必要性や協力金の大雪山全体への展開について考えていくため、そして白雲岳の協力金の取組みが昨年・今年と始まり、協力金について大雪山全体の共通テーマとして扱い、今年度の協力金の取組み結果も含めて情報共有をして、今後の進め方について議論していくためである。
- ・第3回までの部会で、登山道管理者不在の未執行路線についてどのような維持管理を行って行くか、登山道管理者がいる場合といない場合の違いについて、部会を通じて話をしてきた中で、将来的には大雪山国立公園全体の組織作り、協力金の展開についてどう広げていくのかが大きなテーマになってきた。本日は、これまでの議論を踏まえた形で、改めて具体的に検討していくべき課題、これから議論すべき基本的な方向性について共通認識を持ちたいと考えている。
- ・マナー、ルール等の普及啓発について大連協としても不十分なところもあるので、普及啓発の強化についても議論を進めて頂き、有意義な、建設的な議論となるようお願いしたい。

### 2. 議事

#### （1）協力金を活用した登山道の維持管理について

##### 1) 白雲岳周辺登山道

資料1-1より上川町より説明

#### ■上川町

- ・2021年より白雲岳避難小屋周辺登山道維持管理協力金の収受開始、2022年度より登山道整備、広報活動、記録と評価、資金調達という4つの活動を柱に白雲モデルを構築し、登山道補修を行った。

- ・2021年より協力金を使った登山道補修を北海道山岳整備が行っている。
- ・協力金の周知に向けた取組みとして、今年度は登山口で手に取りやすいカード（QRコード入り）を作成した。今年度の協力金2,456,357円、昨年度より減少ではあるが、昨年度は協力金が開始された年であり一個人による高額な協力金があったことが理由である。

#### ■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・協力金について補足する。協力金額は昨年よりは低い、高いレベルで維持できていると認識している。管理人もしっかりと利用者に対し協力金の説明をし、整備人も登山道で整備を行い、登山口で協力金の情報を周知できていたこと、白雲の協力金については、たくさんの方々の協力の下、よい結果につながっていることに感謝する。
- ・協力金の使途内訳は整備資材、センサー、ヤシ土嚢の購入に約70万支出、昨年より資材の値段が高騰している。未使用の資材は来年に使用する。
- ・人件費に120万円弱支出。整備人を3ヶ月間2名雇ったが、月20万は人件費としては作業量を考えると安すぎると感じている。実際のところ、高原温泉沼巡り登山道の橋の補修や様々なイベントでの整備にも携わってもらい、そこで雇用にかかる費用を捻出した。
- ・情報発信として協力金の周知・ノベルティ作成で88万円支出したうちの半分は手ぬぐい代である。協力金1,000円のうち手ぬぐいの費用は200円、費用対効果があると感じている。手ぬぐいを楽しみに来られる方も多く、手ぬぐいは続けて行くべきである。その他、SNS等の発信、HPサーバー管理費、カードのデザインも含めた作成費用等に支出。整備人の車や住居、傷害保険は、整備人を雇う上で重要なことであり、今後整備人の雇用を続けて行くためには必要な経費であるのでここより支出した。
- ・(予算額)268万円のうち267万円を使わせて頂いた。来年度以降、企業からの寄付金などの収入が見込まれること、助成金なども総合的に整備に使えていけたらと考えている。

#### ■NPO法人ひがし大雪自然ガイドセンター 河田氏

- ・協力金が昨年、今年と高い水準で収受できたことは、登山者の理解を得られた成果である。収支決算は大雑把ではなく、細かく決算書を作り、大連協のHPで紹介していくことで、今後企業などから協力を得られるのではないかと考えている。

#### ■上川町

- ・協力金の透明性は必須なものと考えている。令和3年度の協力金については、上川町HPに公表済みであり、令和4年度も準備でき次第公表していく予定である

#### ■山岳レクリエーション管理協会 山口氏

- ・協力金の7割が山岳整備に使われているのは、良いことである。普通、協力金の6割が返礼品に使われることが多い。上川町主体で動いているのであれば、白雲モデルを進めていくためにこの調子ですすめて行ってほしい。

#### ■上川町

- ・この取組みの主体は上川地区登山道等維持管理連絡協議会とあって、町内の関係機関が集まった協議会であり、これからも取組みを進めていく。

#### 2) 中岳裾合平線

資料1-2より説明

#### ■北海道上川総合振興局 中島氏

- ・旭岳裾合平登山道のクラウドファンディング（以下CF）を活用した登山道補修事業の実施について報告する。事業執行している北海道が取り組みやすい方法であるため、CFを使った。本来は環境省などの自然公園法の許可が必要だったが、公園事業として事業執行をしている北海道の維持管理行為ということで手続き不要で進められた。また道有林でもあるので、保安林作業許可を取得したうえで進めた。実際、裾合平の木道のあまりにもひどい荒廃に予算も付かない状況であったため、CFを行った。協力金は、その場所を利用する人のみへの周知となるが、CFだと、過去に大雪山に登ったことがあるなど、思い入れのある方からも寄付をお願いすることができた。実施に際しては、山岳関係者にも周知をお願いしてご協力いただいた。たくさんの応援メッセージやご意見も頂いた。
- ・目標金額200万のところ、192人の方から330万の寄付をいただくことができた。今後、どのように寄付金のうちの200万円が使われたかを報告する。残額の130万は、来年度に裾合平の登山道整備に使う。
- ・CFについて、来年度も行う予定。ふるさとチョイスという運営会社に払う委託費は、CFで集めた寄付金からではなく、北海道予算で支払っている。来年度の運営費等については検討中。
- ・9月3、4日に行った作業の様子は資料の通り。ヤシロールの敷設、センサーによる土留め設置、木道撤去などを行った。グレーチングは後日大雪山山守隊が40枚人力で荷揚げし敷設を行った。
- ・撤去した木道の木材は、燃料等で再生利用する方向で、山守隊と旭岳RWに協力頂いて、来春に下ろす予定。

#### ■Asahidake trail keeper 藤氏

- ・CFの呼びかけの段階でどの程度施工するかお知らせしていたのか？

#### ■北海道上川総合振興局 中島氏

- ・ざっくり一番ひどいところから直すと呼びかけた。というのも雪が溶けてからの整備箇所の確認、準備では実際に活動するのは間に合わないため、先にCFの呼

びかけを行った。

■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・ここ 10 年以上荒廃の様子を見てきて、すべての木道を直すのは莫大なお金がかかり、すべて税金でやるのは不可能である。また、土木業者に頼む場合だと人件費などを差し引くと実際に登山道の補修にかかる費用は減る。大雪山全体の土木工事による補修は不可能という立ち位置で計画させていただいた。より小さなお金で最大の補修できるようにということを考えて、今年度整備を行った。グレーチング 1m につき資材費に 1 万円かかる、800m だと運搬費を含めると数千万かかる。どのようにお金をかけず、整備するかが問題である。今後長い時間かけて施工をしていくので、今後も協力願いたい。

■北海道大学大学院農学研究員 愛甲氏

- ・多く集まって良かったと思う。協力金を同様に取り組んでいる上高地も前年と比べ今年度は落ちたと聞いているが、CF も同様。2 年目はお金が集まりにくいといわれているので、どこにどの程度、どのくらい費用がかかるのか、さらに内容を詳しくして呼びかけをする必要がある。

3) ヤンベタツプ五色岳線について

■事務局

- ・十勝総合振興局が欠席。環境省の自然環境整備交付金を活用している事例として事務局より、資料 1-3 により説明
- ・ヤンベタツプ五色岳線に敷設された木道のうち、180m 区間の危険な木道を撤去した上でグレーチングを設置した。まだ使える枕木については、そのまま使用することとした。施工箇所の選定は、愛甲准教授や岡崎代表のご指導のもと行った。
- ・今回施工した 180m 以外の所は R5 年度設計、R6 年度施工で検討しながら進める予定である。

■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・この整備についてグレーチングの敷設にあたる設計に関して手伝った。木道 4 キロ近くあるが数年の間に補修が必要である。一方で、1,600 万円でもわずか 180 m の整備しかできていない。登山人口の割合を考えると、補修に多額の税金を使うことは難しい。今後は、できるだけ費用を抑えつつ、長い区間を施工できるような方法を検討していただきたい。今回施工した業者の方は山なれしていない方が多く、プレハブ設置など作業員の宿泊場所等などにもお金がかかっている、そこへお金をかける必要はないのではと考える。交付金すべてが整備に回るようなお金の使い道を考えてほしい。

■北海道大学大学院農学研究院 愛甲氏

- ・プレハブ設置箇所等を決める時にどのような問題があり、どのような対処をしたか、聞きたい。
- ・必要な場所に税金を使って整備することは良いことであり、税金の使い道について様々な人に知ってもらうことも大切である。また税金の使い方を登山者にも考えてもらうのにもよい機会である。

#### ■事務局

- ・いただいたコメント等は、十勝総合振興局に伝えることとしたい。

### (2) 登山道等の継続的な維持管理体制について

#### 1) 登山道等の継続的な維持管理について

#### ■事務局

- ・資料2-1より登山道等の継続的な維持管理について説明  
本日の部会の冒頭において、登山道の維持管理を協力金や公共予算等を使って行った事例について報告いただいたが、今後も継続して行って行くために、基本的な考え方を共有したいと考えている。
- ・大雪山国立公園における登山道等の協働型管理の基本的な考え方として、登山道管理者だけでは、対策が登山道の荒廃のスピードに追い付かないため、登山道管理者、利用者等・維持管理者（登山者、ボランティア、民間活動団体、企業等が含まれる）が協働して登山道維持を大雪山全体で行う組織作りを進めていく。
- ・「白雲岳」等の協力金の仕組みを大雪山全体に広めていく。
- ・CF、企業からの寄付、助成金などを含めた協力金などを管理し、登山道整備を大雪山全体広げるための仕組み作りを進めていく。
- ・協働型管理を進めていくことで、保護と利用のバランス、自然環境の保全と利用環境の質を確保していく。
- ・(資料の1ページ目の図より説明) 登山道管理者（事業執行者）は公共予算を使って、例えばへりを使うなどした大がかりな基盤的な登山道施設の整備を行う。その他、避難小屋やトイレの整備、サインの整備、定期的な施設点検の役割を担う。
- ・利用者（維持管理者）は協力金等の様々な資金を活用して、公共事業ではできないきめ細かい登山道の維持管理、中長期的な視点に立った継続的な維持管理、補修技術者の人材育成等を担う。
- ・登山道管理者、利用者側が両輪の関係で取組を行うことで、自然環境の保全、質の高い利用環境が確保され、大雪山国立公園の資質の保持につながる。
- ・登山道管理者（事業執行者）がしっかりと存在することで、維持管理者が、計画的に継続した維持管理を行うことができる。維持管理者には情報発信、担い手の

育成、賛同してくれるボランティアとの連携活動などを主導していただく。

- ・登山道の管理者を明確化(事業執行)し、一元的な維持管理体制を構築していく必要があり、協力金が大雪山全体に広がっていくような仕組み作りを進めていければと考える。また、登山道だけに限らず、野営指定地、避難小屋、トイレ等なども含め一体的に管理できるような体制を進めていきたい。
- ・大規模な侵食が進み再整備が難しい場所、例えばヒサゴ沼周辺歩道について、今年度から設計を行い、公共事業による基盤的な整備と維持管理をセットで考えて行きたいと考えている。行政だけでは難しい問題であるので、みなさまと共有したいと考えている。

#### ■山岳リクリエーション管理研究会 山口氏

- ・異議はない。と同時に今さらその説明は必要ないと感じる。大雪山の構想は過去の登山道整備指針にも書かれてあって、20年近くも同じことを言われていて、私は賛成している。この体制の弱点は管理者が3、4年おきに代わることであり、様々な過去の事情を知らない方がいるということである。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲氏

- ・登山道管理者は行政、維持管理者は民間と区別してかき分けられると、施設点検、侵食防止策について維持管理者に発注し、そのかかる費用は協力金だけで行うように聞こえるのではないか。また、担い手の育成について、維持管理者だけでは難しい、はっきりと管理者、維持管理者と書き分けられない方がいいのではないか。
- ・管理者側の役割の中に登山道管理水準と技術指針のことが書かれていない。整備はこの2つをどう運用するかは管理者の責任となる。それを記載しておかないと登山道管理者自体が水準を忘れていないかと感じてしまう。

#### ■事務局

- ・実際には、管理者が請負業務として維持管理を発注することももちろんあるが、それぞれの役割を端的に示すために違いが分かるよう表現した。今後も維持管理の一部は公共予算によっても行う考え方は変わらないのでご理解いただきたい。
- ・管理水準や技術指針を改訂していくことも、管理者側の役割と認識している。担い手の育成においても、登山道管理者も当然関わっていく

#### ■大雪山倶楽部 森田氏

- ・補修技術者の育成について、CFや協力金だけでは、生業としてやっていく方を育成するのはむずかしい。登山人口は国民の5%ほど。予算がつきにくいとはいえ生活が成り立たない。国も道もお金がないのは理解するが我々も厳しい。そこも含め考えてほしい。

#### ■北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡邊氏

- ・整備人の問題について、上川高校で登山道整備をする人を育成していくプログラ

ムを作ってもらおうとか、大学のレベルで、きちんとした人材育成していくようなことまで踏み込んでいかないと解決しないのではないか。

- ・愛甲准教授が発言された管理水準、技術指針をまとめていくことについて、大雪山ビジョンの実現に取り組んでいくなら、大雪山ビジョンの中にもきちんと書き込んでいく必要がある。

#### ■事務局

- ・大雪山ビジョンは、山岳地域だけではなく山麓部も含めた大雪山国立公園全体のビジョンである。今回は維持管理部会であり、登山道の荒廃を維持管理でどのようにしていくかに焦点が当たっていたので、資料上では大きな目標である大雪山ビジョンについて表現できていないところもあった。しかしながら今回の資料にある、「自然環境の保全、質の高い利用環境の確保。大雪山国立公園の資質の保持」は大雪山ビジョンで掲げる目標につながるものである。

#### ■NPO 法人ひがし大雪自然ガイドセンター 河田氏

- ・事業執行者がいない未執行区間の多い東大雪も大雪山ビジョンの中に入れてほしい。笹刈、草刈しかできてない状況が続いている未執行区間を置きざりにしないでほしい。

#### 2) 一元的な維持管理体制の構築

#### ■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・資料 2-2 より説明。登山道の維持管理を 20 年以上いろいろやってきたが、なかなか変わらない仕組みを行政に変えてほしい、行政がやるべきだとお願いをしてきたが、逆に民間こそ何もできていないのではないかと考え、民間としてできることを考えてきた。そこで、将来的な一元的な管理体制、広域的な管理体制について、管理団体の必要性を考え、その構想を伝えたい。
- ・実際、利用や気候変動による侵食荒廃に対して生態系保全の管理が追いついていないのは誰が見ても明らかであるが、利用者、地域住民、企業などが登山道の維持管理に協力したいが仕組みが整っていないため、協力できる手段がないのが現状である。
- ・海外の国立公園の保全ボランティア団体は非常に多く、数万人がボランティアに登録し、年間のべ 700 日以上の登山道整備活動を行っている事例もある。ボランティア団体も、寄付金や行政からのお金に頼るだけではなく、自ら稼いだお金を使って、登山道管理を行っている。企業も、行政もボランティアもバランス良く、利用と保全の管理を進めることができている。10 年前と比べ日本でも利用者も保全に対する価値観が変わり、そのような傾向が高まってきていると考える。
- ・広域的な管理体制、大雪山財団（仮称）と資料に記載したが、我々山守隊は、大雪山財団作りを目指し発足してきたが、目的として利用者の歩きやすさよりも、

地形や、植生復元による生態系保全を守り、生態系が存続しうる持続可能な利用方法の策定、提言、実施を行いたいと考える。知床ではルールを策定し生態系の存続がメインとなった利用がされている。そのような取組が必要である。

- ・現在、協力金を集めても部分的にしか収受できず整備できないことから、大雪山全体で資金調達・分配できる仕組み、基本的な運営体制が重要。それがないと人気のある山は整備が進み、そうでない山は永遠に直らない。
- ・ボランティア参加者は50代が多い。現在整備に携わっている人は10年後に働いてくれるかどうかは難しいが、植生回復は長い期間を要するので、小学生、中学生等若い人々にも環境保全に関わる啓蒙活動が重要と考える。
- ・林野庁、北海道、環境省、地方自治体、協議会などと協働し、又客観的に我々の行動をみるためにも他地域や企業とも連携をすることが大事だと思う。外地域から大雪山がどう見られるかという意味で有効。企業もアウトプットする人に寄付を行いたいのではと考えている。自分たちの状況、環境を企業に伝えていくことが大事である。
- ・初期の事業内容案としては、保全専任スタッフによる各登山道及び周辺の地形・植生復元。白雲岳避難小屋で整備人を置いてやってきたようなこと。また登山道整備技術指導者の人材育成、企業への研修、環境保全活動や工作物、施設の補修など。今自分がやっていることを引き続き実施していくこと。
- ・また、財団として、グッズ販売、ふるさと納税の活用、企業からの助成等など、協力金だけに頼らずに、自らも稼いで、設計、整備へと回していきたいと考えている。
- ・山守隊では情報発信を続けてきた。情報発信が大切であるので、登山道整備の成果だけではなく、登山道の問題も情報発信し、財源確保のきっかけを作っていきたいと考えている。
- ・「人が来るほどに美しくなる山」を目指し、保全と利用を同時に考えて地域の価値を高めていきたい。保全の最先端地域として大雪山はふさわしいと考える。

#### ■事務局

- ・参考までに、国立公園の保全を目指す民間の公園管理団体で、国から指定されているのは知床財団を含め、全国で計7団体ある。

#### ■山岳レクリエーション管理研究会 山口氏

- ・岡崎さんの意見を受けて、財団を作る上で、大雪山の9割は国有林で、未執行路線の場所が多いので、森林管理署はどのように考えているのか聞きたい。環境省、道有林については財団設立には前向きだと感じている。知床では国有林に関しても世界自然遺産で関わっており、同じような形で、協働で行っていくことはできなくはないと思う。

#### ■上川中部森林管理署

- ・財団について、基本的には登山道敷地としての貸付が前提である。無償貸付は環境省や北海道、市町村などの地方公共団体であり、そこで国立公園の登山道の維持管理をしていただくのが原則である。

■山岳レクリエーション管理研究会 山口氏

- ・その原則は20年前から理解している。ナショナルパークとは国が管理する、国民の森であるという考えがアメリカにあるが、日本はどうか。

■上川中部森林管理署

- ・当署は国立公園の管理はしない、林業を主管する官庁であることをご理解願いたい。

■事務局

- ・今までは、事業執行するに当たって、何らかの施設整備が通常であったが、今後は、必要な維持管理を行うために、各自治体が事業執行者となり管理者としての名前を貸して頂く役割が重要となることを、各自治体に説明をしながら、財団設立に向けて調整を進めていきたいと考える。すぐに事業執行が進むとは考えていないが、必要な維持管理をしていく上では、国有林の無償貸付がどうしても必要になってくることを理解してもらいたいと考えている。

■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・先ほど示した案は現状のルールに従って考えた案である。民間ができることをやっていきたい。ルールを無視したもの、新しく作るということは考えてない。

■アースウィンド 横須賀氏

- ・利用する歩道の管理区分は難しい。事業主体の理想像を得ようとしても難しい問題。人材教育が必要となるが、それには多くの人が必要。参考例として、イギリスには、ナショナルトラストという環境保護の団体が主体となって、登山道などの維持管理を7泊8日の研修で学ぶ制度がある。活動内容としては、登山道の整備、木を切り、柵を作る研修を一人7~15万円程度を払って毎回10名程度が講習を受けている。一日の作業時間は朝8時から夕方4時まで、簡単なものから難しい作業までいろいろあり、研修を受ける人の宿泊所はお城やマナーハウスで、研修施設の設備が整い、研修内容もとてもしっかりしている。特に英語圏の人が参加し、海外からの寄付も多い。また、世界に大勢いる会員の会費で本部運営は回り、事業が動いている。財団の考えは、一昔前だと日本では難しかったが、岡崎氏が成功してくれるとうれしい。

■鹿追町ジオパーク推進課自然館 大西氏

- ・財団について、大連協が財団を管理していくことは可能か。以前、大連協がすべての登山道の管理者になれないかと訪ねたが、その後何か進展はあったのか。

■事務局

- ・大連協は現存する組織としては協働型の代表的組織だが、人材育成等まで考えた

稼ぐ自立した団体になりえるかを考えるとむきびしく、また、大連協の守備範囲は山岳地域だけではなく山麓地域を対象とした国立公園全域であることから、登山道の維持管理を担う組織とは性格が異なる。

- ・制度上はおそらく、大連協が登山道管理者になれないことはないが、事例も少なく、国有林の無償貸付が受けられない。

■鹿追町ジオパーク推進課自然館 大西氏

- ・未執行区間については、各自治体と連携して、解消していくという方向で良いか。

■事務局

- ・岡崎代表の発言のようにできることの幅を広げ、必要な登山道維持管理をするための必要条件として、未執行区間を持つ自治体に事業執行に向けた相談を行っていききたい。

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡邊氏

- ・具体的な立案に岡崎氏に感謝。大雪山財団に向けての具体的な案がようやくできてきて大きな進展だと感じている。利用者に、利用と保全を同時に考える必要があり、だからこそ財団が必要であるというメッセージを元に活動を続けていけるといいと思う。
- ・専任スタッフをどのくらいの規模で考えているのか、教えて頂きたい。各分野専任スタッフをつけることが望ましいと考えるが、確保・育成は難しいのではないかと考える。

■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・選任スタッフは必要であり、現段階では私一人で行っていて、規模拡大は難しい。少人数、小規模で結果を出しながら進めることが望ましい。北海道山岳整備では整備の幅を広げて、整備人を十数人単位で育成していく予定であり、そのままスライドできればと考えるが、最終的に大雪山全域で行って行くためには、数十人の規模の整備人となることが想定される。

■北海道大学大学院地球環境科学研究院 渡邊氏

- ・ある程度最初から規模を広げて財団づくりを進めた方が持続的に活動できるのではないかと考える。

■Asahidake trail keeper 藤氏

- ・公園管理団体には反対ではないが、会費、寄付等のお金を集めるとなると活動の規模も大きくせざるを得ない状態にならないか、整備がやり過ぎにつながらないかと心配している。ボランティアができる施工ばかりにならないか。人が来ることで、人工的な山になっていかないようにしてほしい。整備を見せるための整備ではなく、ゆっくりでもきちんと直していくやり方、補修活動なら賛成。
- ・各それぞれの山域で活動している人は、財団ができることによってこれから活動

できなくなるのか？

■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・今までやっている人を排除する意向はない。整備のための整備にはしない。

(3) マナー等普及啓発に関する一元的な情報発信について

■事務局

- ・資料3より説明 コロナ前の段階に登山者数が戻る中、初心者、少数グループ、トレラン、インバウンドなどの利用者の増加が見込まれる。利用形態の多様化における利用のルールを整備し、これまで当たり前だと思われてきたルールについて、大連協 HP、facebook において注意喚起を行っている。また、現地で張り紙などの啓発も行っている。
- ・実際、問題の多様化、利用者の多様化で、マナー違反のいたちごっこが続いている。
- ・今後さらなる行動制限緩和により、利用者、インバウンドも増えていく中で、より効果的なわかりやすい情報発信行って行きたいと考えている。今後の情報発信に向けて、皆様のご意見を頂きたい。

■山岳リクリエーション管理研究会 山口氏

- ・マナー、エチケットという言葉は大雪山では使わないようにした方がよい。価値観が多様になってきている社会では意味がない。マナーは同じ価値観同士の方がこうしましょうと決めたもの。やってはいけないというルールが必要。やってはいけないこととやっていいことを明確化することが必要である。

■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・マナーに頼っている時代ではない。ウェブサイトでルールを伝えていくことも今は難しい。今は情報を探そうとするのは HP ではなく、インスタ、ツイッターなどで行って、Facebook ですらない。この辺を理解してやっていかないと永遠に伝わらないと感じる。伝えたい相手が何で情報を得ているのか考えて発信を行う必要がある。今あるやり方では古い。実際 YAMAP を使った登山者が多く、情報共有をしてバリエーションルートを歩く人もいる。北海平でテントを張り、ハイマツを薪として燃やしていたという事例もある。早めに打ち出していく必要がある。仮に公園管理団体ができればそこで発信しなければならない。

■NPO 法人ひがし大雪自然ガイドセンター 河田氏

- ・上士幌方面の登山者は、若齢化が進んでいると感じている。というのも 2016 年の台風による林道の災害で、石狩岳を除く東大雪の山は山頂が遠い山が増えてきて、高齢者が登れない山が増えていることも一因であろう。
- ・Facebook は時代遅れで、今やインスタ、ツイッターが情報発信の主体。価値観の

違う若い人たちにはマナーは伝わらない。

- ・トレランが増えている。「ニペの耳」の件に関して、「映え」を狙い、「カトちゃんぺ」をやるのがはやっている。そんな人たちにこそ、伝わる情報発信が必要である。
- ・以前はグループでのテント宿泊が主であったが、コロナ禍で一人テントを張る人が増えている。その分、場所をとり、テントでお花を踏み荒らす事態にもなっている。駐車場不足、利用者同士のトラブルも増えている。
- ・マナーというより、ルールを発信していく必要がある。

#### ■事務局

- ・今後の対応として、改善策を出し切れていない。  
脆弱な自然環境である大雪山にふさわしい、ルールを簡潔に伝えていく必要がある。
- ・一般的な内容よりも利用者にもっと響くような大雪山の特徴を打ち出したルール作りを進めていく。

#### ■北海道大学大学院農学研究院 愛甲氏

- ・ヨーロッパではサイバーレンジャーがいて、ルール違反を逮捕している。ネットパトロールをして正していく活動をしている。大連協の公式なアカウントで注意喚起を行うことは必要であり、どれだけの人にどれだけの情報が届いているかの分析が必要である。

### 3. 報告事項

#### (1) 各団体からの活動状況報告について

##### ■北海道山岳整備 岡崎氏

- ・今年度行われた登山道整備活動の中で、抗議したい案件があった。資料4の北海道山岳整備からNPOかむいによる赤岳第4雪渓登山道整備に関し考察している動画を見て頂きたい。
- ・赤岳第4雪渓の整備のやり方は間違っていて、違法行為に近いと考えている。

##### ■大雪山山国立公園パークボランティア連絡会 黒田氏

- ・岡崎さんが今話された案件、本日どのような話がされるか興味があった。私は初めて大雪山に入った時に、「高山植物は何が大切かわかるか。高山植物は低灌木であり、木を切ってしまうと成長するのに20年30年と長い時間がかかるから貴重なんだ。」と教わった。登山道整備に関わる方が、高山植物に対する配慮を欠いた施工をするのは問題がある。どのようなことが行われ、どのように対応されたのか、次回の会議できちんと示してほしい。
- ・実際の現場を見たが、法面の処理がひどく驚いた。登山道の部会だからこそ、施工に関しても反省すべき所は反省しながら、今後進めて頂きたい。

■北海道上川総合振興局 中島氏

- ・皆さんのお怒りはごもっともであるし、管理する立場にありながら、怒りを感じている。
- ・この箇所の施工については昨年度の登山道技術検討会でも議論されたと聞いている。今年度は施工前に振興局、環境省、NPO かむいの三者で施工方法について会議を行い、施工についての基本的な考え方の共通認識を持ったはずであったが、施工後 SNS を通じて、それと異なった施工をしたことを知った。愛甲准教授や岡崎代表等とも相談し、今年度は時間もなく、中途半端な施工になると決定し、今年度は何もしないということで終えた。年明けの登山道技術検討会でご意見をいただいたうえで、対応方針を決めていく。

■事務局

- ・年明けに、登山道整備技術検討会を行う予定である。

■北海道大学大学院農学研究院 愛甲氏

- ・この一件について、この部会できちんと報告されなかったのが非常に残念。登山道維持管理部会の元々の役割は登山の整備技術、登山道整備の考え方自体が確立していない中、関係者がさまざまな情報を共有し、参考になるところは参考にしようという趣旨であった。だからこそ、この問題はこの部会で話し合い、共有すべきで、関係者みんなの問題として考えることで前に進むことができると思う。この事件を隠してはいけない。

■事務局

- ・そのような意図はまったくなく、先ほどの黒田会長からの質問がなくても、振興局から情報共有していただく予定としていた。
- ・維持管理部会は個別の施工事例について議論する場ではないが、各団体から取組状況に関する情報共有を行う場として、報告に時間を設けている。
- ・登山道補修の個別事例に関しては、別途、技術検討会において検討を行うこととしている。その技術検討会における検討結果については、登山道管理者を通じて、維持管理部会に共有されることになる。

■山岳リクリエーション管理研究会 山口氏

- ・愛甲氏に同感。この部会ではいろんな失敗も出て来ると思われる。だからこそ、「失敗を隠さない、逃げない、嘘をつかない。」を徹底し、みんなで検討していく場所としていくべきである。

■大雪山倶楽部 森田氏

- ・携帯トイレブース設置に関して、お願いがある。今年度裾合平のツアーで、7月だけでお客さん400名近く案内しているが、ツアー客は中岳までいかないため、来年度裾合分岐に携帯トイレブースがほしい。
- ・先ほど税金の話が出たが、今年度我々が行った登山ツアーで7月に1,700人、秋

に 5,500 人のガイドをした。人気のある大雪山のツアー代金の経済効果は一人 7 万であり、約 7,000 人と考えると経済効果は 5 億である。税を使って登山道整備することも大切なのではないだろうか。

■事務局

- ・本日はありがとうございました。今後、大雪山全体の組織作りに向けて、考え方、方向性が共有できたと考えている。次回はより具体的な話ができるように調整を進めていく。
- ・普及啓発についても、ルールという表現に統一し、大連協の情報発信について改善していきたい。

4. その他 質問・意見特になし

5. 閉会

(議事録作成：大雪山国立公園連絡協議会事務局 大雪山国立公園管理事務所)